SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

分裂文AナノハBダについての考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊井, 浩子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006607

分裂文AナノハBダについての考察

熊　井　浩　子

【要　旨】

日本語名詞述語文の類型とAナノハBダで表わされるナ分裂文を比較し、その置き換え可能性及びナ分裂文の意味や機能を考察した。その結果、前項の節らしさが明確な場合ほどナ分裂文になりやすいこと、Aでないものや Bでないものとの対比という条件のもとに、役割・値解釈の同定文や倒置同一性文との近接が見られること、ABが単なる帰属・同一の関係ではなく隣接関係である場合の倒置指定文の場合にナ分裂文になりやすいことなどがわかった。また、Aが形容詞的な意味や機能をもつ場合にもナ分裂文になりやすい。これにはAが後項名詞句とメトニミー的関係である場合も含まれる。さらに、Aが最上級または何らかの意味で限定された範囲を表わす名詞句である場合、あるいは後件が疑問詞である場合など、特に後件がなんであるかが焦点となる場合にもナ分裂文になりやすい。こうした性質からナ分裂文は見出しなどにも多く用いられているが、単にAハBダと述べる場合に比べ、$\bar{A}$や$\bar{B}$との対比によりインパクトの強い表現となることがこの文型を用いる最大の動機であると言えよう。

【キーワード】ナ分裂文　名詞述語文　意味　機能　対比

1．はじめに

初級の日本語教科書として国内外で広く使われている『みんなの日本語』では、38課でいわゆる分裂文を学習する。この課の文法解説書では(1)のように動詞、イ形容詞・ナ形容詞および名詞の接続のし方が説明されているが、このうち、ナ形容詞と名詞については、plain formの「だ」が「な」に替わると書かれている。この名詞の接続のし方は、26課で学習する「んです」や次の39課で学習する「ので」と同様となる。

(1)

V い-adj	plain form	のは　Nです
な-adj N	plain form ～だ→～な	

(2) This pattern is used when a noun representing a thing, a person, a place, etc., is replaced with の and then taken up as the topic of the sentence. In examples ⑬ and ⑭, （中略） the speaker gives related information in the latter half of the sentence.（この文型は、物や人、場所などを表す名詞が「の」

に置き換えられ、文の主題として取り上げられたものである。例えば、⑬と⑭の例では（中略）、話者は文の後半でその主題に関連した情報を提示する。訳、筆者）

また、ここでは(2)のように物や人や場所などを表す名詞がノに替わって、文のトピックになり、話し手がそれに関連する情報を文の後半で述べる場合の文型であると説明されている。しかし、名詞がノに置き換えられたという説明は必ずしも正しくなく、(3)のように名詞を想定しにくい例もある。

(3)　私が彼女に会ったのは偶然だ。

(4)？私が彼女に会った理由は偶然だ。

(5)？私が彼女に会ったきっかけは偶然だ。

この文型で用いられるノはノの前の節を名詞化するノであるととらえるのが適当であろう。一方(6)のノは名詞の替わりに用いられる代名詞のノである。この二つのノは一見して区別ができない場合もあるが、働きは異なっている。本稿で扱うのは名詞化の機能をもつ前者のノである。

(6)　私が食べたのはあまりおいしくなかった。

これらの解説によると、名詞の場合には「～だ→～な」となり、(7)のように「病気だ」は「病気なのは」となることになる。しかし、名詞によっては(8)のようにNナノハにすると不自然になるものもある。(9)では、ナノのないNハだけの形が自然になる。このような事情もあってか、38課では例文や説明、練習にも名詞接続の形は取り上げられていない。

(7)　病気なのは私じゃありません。タンさんです。

(8)*　山田さんなのは私じゃありません。あの人です。

(9)　山田さんは私じゃありません。あの人です。

では、どのような場合にNナノハになり、どのような場合にNナノハが不自然になるのであろうか。本稿では、このようなNナノハNダとなる場合の分裂文をナ分裂文と仮称し、文の類型との関係を明らかにするとともに、書籍やインターネット、実際の会話などから収集した用例を基に前項や後項の特徴や関係、及び文の意味・機能について考察していく。その際、ナ分裂文の前項の名詞句をA、後項の名詞句をBとし、AナノハBダで表すことにする。

２．名詞述語文と分裂文

２．１　名詞述語文　－考察のポイント－

２．１．１　名詞述語文の類型

日本語には、ハまたはガという助詞とコピュラ、ダからなる、AハBダおよびAガBダという２種類の名詞述語文が存在する。この名詞述語文を砂川（2009）はコピュラ文と呼び、(10)のように、同定文と記述文に分ける。同定文とは「ある役割の値を特定の指示対象によって同定する文」であり、記述文とは「ある対象の属性を記述する文」である。前者の同定文はさらに①から④の４つ、後者の記述文はさらに⑤⑥⑦の３つに分類される。このうち、本稿で取り上げるのは、①役割・値解釈と③同一認定解釈の同定文、及び⑤一般の記述文にあたるAハBダである。

①のような同定文は「今日の当番にだれかが当たっていること」を前提として、「そのだれかが私であること」を主張するものであり、いわゆる②指定文「私が今日の当番だ」に言い換えることができる。このような同定文では、述語名詞句「私」がもっとも高い情報価値を有していることから、砂川はこれを「後方焦点文」と呼ぶ。砂川によれば、この後方焦点文は、聞き手が予想しうる情報を前項「～は」で示して、後項「～だ」で予測できない新情報を導入し、その新たな情報がそれ以降談話主題として引き継がれていく用法が圧倒的に多い。

③はある指示対象と別の指示対象が同一であることを示す文である。このタイプの同定文は「倒置同定文」と呼ばれることもあり、④「あの時の太郎君がこの人だ」と言い換えが可能である。⑤はいわゆる措定文で、Aの性質・属性などをBで表している。このような名詞述語文のうち、AナノハBダで言い換えられやすいのはどの類型であろうか。

⑽　コピュラ文の分類[注1]

コピュラ文の種類		表現形式	用例
同定文	役割・値解釈	「～は～だ」	今日の当番は私だ。①
		「～が～だ」	私が今日の当番だ。②
	同一認定解釈	「～は～だ」	この人はあの時の太郎君だ。③
		「～が～だ」	あの時の太郎君がこの人だ。④
記述文	一般の記述文	「～は～だ」	私は学生だ。⑤
	現象描写文タイプ	「～が～だ」	信号が赤だ。⑥
	修辞的描写文タイプ	「～が～だ」	これがとんだペテン師だった。⑦

２．１．２　名詞句の表す意味機能と名詞述語文の類型

今田（2008）は、西山（2003）のコピュラ文の分類を基に名詞句の表す意味機能と名詞述語文の類型の間にはある一定の依存関係が認められるとして、それぞれの文のタイプで生起可能な名詞句の意味機能について考察している。それをまとめたのが、下の⑾から⒀である。措定文・倒置指定文・倒置同定文はそれぞれ砂川（2005）の⑤一般の記述文、①役割・値解釈の同定文、③同一認定解釈の同定文にほぼ対応すると思われる。

⑾　措定文　　[個体／種／役割]　は [種／役割]（叙述名詞句）だ。
　　例．あいつは馬鹿だ（例文は西山）

⑿　倒置指定文 [役割]（変項名詞句）は [個体／種／役割]　　だ。
　　例．　幹事は田中だ（同上）

⒀　倒置同定文 [個体／種／役割]　は [種／役割]（叙述名詞句）だ。
　　例．　こいつは山田村長の次男だ（同上）

今田によれば、措定文で用いられる述語名詞句は対象の属する範疇や属性、性質を表すため、種や役割を表す名詞を用いることはできるが、個体は用いることができない。一方、倒置指定文は主語に役割を表す名詞句が生起し、述語に個体、種、役割を表す名詞句が用

いられる。これは、このタイプの文の主語である名詞句が変項名詞句であり、ある内包的な概念に対し、その外延を結びつける機能を持っていることから、内包的概念でない個体あるいは外延を列挙できない種ではこの条件を満たすことができないことによる。

倒置同定文は、措定文が対象に属性を与える機能を持つのに対し、属性を与えることによって、未同定の対象を同定するという機能を持つという違いがあるが、措定文同様、主語に個体、種、役割を表す名詞句、述語には種や役割を表す名詞句が生起し、対象と範疇・属性の関係を表すとされる。ただし、⒁⒂はある指示対象と別の指示対象が同一であることを示す倒置同定文であるが、述語名詞句は個人である。このことから、倒置同定文の中には個体を述語名詞句にとる場合もあるように思われる。

⒁　この人はあの時の太郎君$_{個人}$だ。（例文は砂川、下線・注は筆者）

⒂　あのキャプテンは村上$_{個人}$ですよ。（例文は今田、下線・注は筆者）

また、この３つの類型以外の名詞述語文である倒置同一性文に生起する名詞句について今田は触れていないが、以下の例からもわかるように、主語・述語どちらにも個体、種、役割が生起できるようである。

⒃　ジキル博士$_{個人}$はハイド氏$_{個人}$だ。（例文は今田、下線・注は筆者）

⒄　ハリネズミ$_{種}$はヤマアラシ$_{種}$だ。（同上）

⒅　日本の首相$_{役割}$は総理大臣$_{役割}$だ。

このような名詞述語文の特徴はナ分裂文ではどのように現れるのであろうか。

２．１．３　名詞述語文の意味論的・機能論的分析

さらに今田（2009）は、名詞述語文の意味論的・機能論的分析を行っている。今田によれば名詞述語文「ＸはＹだ」は意味論的構造に関して言えば、二つの要素ＸとＹが何らかの関係にあるのだということを意味し、表される関係は⒆のように非常に多様であるとされる。

⒆ａ．帰属関係　　ウサギは草食動物だ。

ｂ．同一関係　　明けの明星は宵の明星だ。

ｃ．役割－値関係　この部屋の温度は19度だ。

ｄ．隣接関係　　僕はウナギだ。（料理を注文する場面で）

帰属関係や同一関係の名詞述語文と役割－値関係の名詞述語文の違いは、後者がＸの存在を前提とし、それがなんであるかを述べる文であるのに対し、前者はＸの存在を前提としていないことであるという。また、隣接関係とは、ＡとＢの関係が帰属・同一または役割－値関係と解釈できない多様な関係を表す名詞述語文である。このような文では、ＡとＢの関係によってＮナになりやすいかどうかが決まってくるのであろうか。このような点も考察する必要がある。

２．２　分裂文

砂川（2007）は、主語が節で構成され、述語がその節から取り出された特定の成文によって構成される名詞述語文を分裂文とし、「～ノハ～ダ」のようなハ分裂文と「～ノガ～ダ」のようなガ分裂文とに分けたうえで、分裂文の機能には、「焦点提示機能」と「特立提示

機能」があるとする。「特立提示機能」がガ分裂文のみに見られる機能であるのに対し、「焦点提示機能」はハ分裂文・ガ文裂文いずれにも認められ、前提命題で欠けている情報を提供することにより、話者と聞き手の間の情報の差を埋める機能である。ただし、ハ分裂文の場合に見られる焦点提示機能はガ分裂文とは異なり、前提命題に欠けている情報「X」は何かという問いに対して「X」は「Y」であると特定することにより、その問いに答えを与える機能である。例えば、⑳㉒は、それぞれ㉑㉓で表されるような前提と主張によって成り立っている。即ち、ハ分裂文は変項Xを含む命題が主語、述語部分が焦点となっており、焦点情報を提示することでその変項Xに値を割り振る機能を果たしているのである。当然ハ分裂文の焦点は述語「～ダ」の部分にある。

⑳　その時現れたのは一匹の熊だった。（例文は砂川）

㉑　前提：その時Xが現れたこと
　　主張：そのXが一匹の熊であること

㉒　それでは、日本はどうだろうか。／冷戦後の世界への対応にもっとも出遅れたのは日本である。（例文は砂川。「／」は段落の切れ目。注は砂川）

㉓　前提：日本はXであること
　　主張：そのXが「（日本が）冷戦後の世界への対応にもっとも出遅れた」であること

このようなハ分裂文における変項Xの値に対する問いの立て方には「Xはなにか」「Xはどれか」などのような特定の指示対象を求めるものだけでなく、「Xはなぜか」「Xはなにが起こってからか」のような、原因や理由、契機に関する問いや「Xは何度目か」のように生起の回数を求める問いなど様々な問いが可能となり、その答えが焦点である述語部に表される。ハ分裂文が㉔のように、述語に「～ため」「～おかげ」「～から」などの従属節が用いられる傾向が特に強いのは、このような談話機能によるものであるとされる。また、特に以降の談話で主題となる重要な内容に聞き手の注意を集めたい場合や、談話の展開の中で特定の指示対象を特に強調したい場合といった談話語用論的な条件が整ったときに述語名詞に格助詞を用いることができる[注2]とされる。そして、この分裂文の述語の示す指示対象が後続談話の主題として語り継がれていく可能性が高いと砂川は考察する。

㉔　人里に熊が現れたのは、森に食料が不足しているためだ。（例文は砂川）

㉕*　人里に熊が現れたのが、森に食料が不足しているためだ。（例文は砂川）

砂川はナ分裂文について特に触れていないが、当然このAナノハBダで表わされるナ分裂文も分裂文の一つであり、上記の性質を有していることになる。

ここで注意しなければならないのは、分裂文は「主語が節で構成され、述語がその節から取り出された特定の成文によって構成される」（下線筆者）ということである。即ち、仮に表面的に実現しているものがNナノハであっても、ノの前は、名詞ではなく、あくまで節であるということである。先に触れた『みんなの日本語』の解説で、単なるNではなく、「N　～だ→～な」となっているのもそのためであると考えられる。㉖は㉗で示したように、Xガ最大手メーカー(A)デアルことを前提とし、そのXが××(B)であることを示しているわけである。Aナノハが㉘のようにAデアルノハに言い換えられたり、㉙のようにAダッタノハになったりすることもあるのはその証拠であると言える。

㉖　日本の最大手メーカーなのは勿論××（会社名）なのですが（後略）#[注3]

(27)　[[Xi日本の最大手メーカーだ] $_{S}$の^{名詞化辞}] $_{NP}$は [××$_{i}$] $_{NP}$だ

(28)　日本の最大手メーカーであるのは勿論××（会社名）なのですが（後略）

(29)　『ラーメン××』系で一番デカ盛りだったのは×××らしい？#

それ故、Aナノハだけでなく、他の補語が実現している場合には、名詞の意味内容を問わず、Nナの形になる。例えば(30)のもとの文は(31)であり、節がノによって名詞化されている。この文の構造は(32)のように表される。

(30)　×××（メーカー名）が激安なのは携帯オークション#

(31)　×××は携帯オークションが／で　激安だ。

(32)　[[×××がXi激安だ] $_{S}$の^{名詞化辞}] $_{NP}$は [携帯オークション$_{i}$] $_{NP}$だ

このような例には、ほかに(33)から(35)のようなものがある。いずれもAナノハをAハに変えると(36)から(38)のように、やや据わりが悪くなる。

(33)　ジキル氏と同一人物なのは誰か？

(34)　和菓子自体がうさぎなのはこの２つ位なんだけど#

(35)　妹が学生なのは田中さんだ。

(36)？ジキル氏と同一人物は誰か？

(37)？和菓子自体がうさぎはこの２つ位なんだけど

(38)？妹が学生は田中さんだ。

もちろん補語が省略されている場合もあるが、例えば(39)は、「私が」を補ってみると(40)のように節であることは明らかである。

(39)　もう一つ疑問なのは、×××君（名前）の存在です。#

(40)　もう一つ（私が）疑問なのは、×××君の存在です。

また、(43)のように副詞的成分がつくと(42)に比べて節らしさが増し、Nナノハがより自然になる場合もある。

(41)　司会は田中さんだ。

(42)　司会なのは田中さんだ。

(43)　今回司会なのは田中さんだ。

このように、他の補語との共起や副詞的成分の付加などによって、前項が節らしさを保っている場合にはナ分裂文が自然であることがわかる。

さらに、データを収集して気がつくのは、AナノハBダカラダ、あるいはAナノハBマデダや、AナノハBノ後ダのように、名詞のあとに格助詞や時、場所、理由などを表す接続表現を伴う例が多く見られることだ。このこと自体はナ分裂文に限らず、(44)のように一般の分裂文にも観察される現象であることは砂川も指摘している。例えば、『中級日本語』でも、５課で(45)のように、「てから／後／時／途中」のような後続表現とともに用いられる例が紹介されているが、Nダの用法は取り上げられていない。

(44)　人里に熊が現れたのは、森に食料が不足しているためだ。（例文は砂川）

(45)　北海道で春らしい季節を迎えるのは、五月になってからである。（例文は『中級日本語』）

特にナ分裂文の場合、AナノハBダの用例がなかなか見つからないのに比べ、Aナノハ

Bダカラダなどの形の用例は比較的採取しやすいことからも、前者に比べて使用頻度が高いのではないかと予測される。これは、このような分裂文は、AナノハまたはAデアルノハ以外では表せないことによると思われる。多くのAナノハBダは、多少据わりは悪くてもナノを省略してAハBダにすることが可能である。それ故敢えてAナノハにするにはそれなりの必然性が要求される。しかし、Bが格助詞や時などの接続表現を伴う場合には、単なるAハではなく、引用符「 」、“ ” などをつけて、「いわゆるN」のような形にする場合を除けば、AナノハまたはAデアルノハの形以外はとりにくい。つまり、Aナノハが選択される必然性が高いということである。

(46)　夜型なのは社会に対する罪悪感からだよ#

(47)　モバイルコンテンツ事業などを展開するメディアインデックスは、無料で投函できる年賀はがき「tipoca（ティポカ）」の受付を開始した。無料なのは広告が入るためだ。#[注4]

(48)　（私が）学生なのは明日までだ。

それ故、AハBダとAナノハBダの違いが特に問題になるのは、述語としてその節から取り出された成文が節の述語名詞句で、分裂文として実現された主語が節の主語となっている(49)のような場合と(50)との違いであることがわかる。

(49)　今日の当番なのは私だ。

(50)　今日の当番は私だ。

３．名詞述語文の類型と分裂文

本節では、名詞述語文とナ分裂文の関係について考察する。砂川・今田の名詞述語文の類型においてとナ分裂文と置き換え可能なのはどのタイプの文であろうか。AハBダから作られる分裂文は理屈の上では(51)(52)のように２とおりの可能性がある。

(51)　$[\,[\text{AガX}_i\text{ダ}]_s\ \text{ノ}]_{NP}$ハ $[\text{B}_i]$ ダ　→AナノハBダ

(52)　$[\,[\text{X}_i\text{ガBダ}]_s\ \text{ノ}]_{NP}$ハ $[\text{A}_i]$ ダ　→BナノハAダ

しかし、名詞述語文及びハ分裂文の焦点が後項にあることから考えると、AハBダの焦点はBダにあることから、BナノハAダはもとの文、AハBダとは焦点が異なる。とすると、焦点という観点からAハBダに対応するのはAナノハBダであることになる。

(53)　$[\,[\text{今日の当番がX}_i\text{だ}]_s\ \text{の}]_{NP}$は $[\text{私}]_i$ だ→今日の当番なのは私だ

(54)　$[\,[\text{X}_i\text{私だ}]_s\ \text{の}]_{NP}$は $[\text{今日の当番}]_i$ だ→*私なのは今日の当番だ

役割・値解釈の同定文AハBダは、Aの名詞句の意味によっては(55)(56)ようにAナノハBダと意味的に近接することがわかる。

(55)　今日の当番は私だ。

(56)　今日の当番なのは私だ。

ただし、AハBダであれば常にAナノハBダになるわけではなく、名詞によっては(58)(60)のように不自然となる場合もある。

(57)　山田はあの人だ。

(58)？山田なのはあの人だ。

(59)　－シドニーは犬？

－ううん、犬はロキシー。

(60)　－シドニーは犬？

－？ううん、犬なのはロキシー。

この場合、Aが役割を表す名詞句である場合は比較的自然になる。一方個人や種の場合には不自然となる。Bはどのタイプの名詞句でも問題ない。これは、倒置指定文と同様であるが、特にナ分裂文の場合、変項Xを含む命題が主語となり、その変項Xに値（この場合はB）を割り振る機能を果たしているという特性から、Aは外延を列挙可能な名詞である必要性が特に強いことになる。

(61)　社長$_{役割}$なのは田中$_{個人}$さんだ。

(62)　ペットの王様$_{役割}$なのは犬$_{種}$だ。

(63)　今回議長$_{役割}$なのはフランス大統領$_{役割}$だ。

ただし、Aが役割であればいつも適格な文になるというわけではなく、Aがなんらかの事情で強調される必要があるときにより自然になる。これは例えばAとAでないもの$\overline{A}$やBとBでないもの$\overline{B}$が対比的にとらえられていると想定できる状況である。

(64)　－山田さんは先生だっけ？

－ううん、先生なのは田中さん。山田さんは大学院生。

(65)　－山田さんは先生だっけ？

－ううん、先生なのは山田さんじゃなくて田中さん。

(66)　このグループには学生と先生が１人ずついます。学生なのは山田さんで、先生なのは田中さん。

次に、倒置同定文（同一認定解釈を表す同定文）も後方焦点文であるとされるが、このタイプの同定文はAナノハBダになりにくい。

(67)　この人はあの時の太郎君だ。（例文は砂川）

(68)*　この人なのはあの時の太郎君だ。

(69)　あのキャプテンは村上ですよ。（例文は砂川）

(70)？あのキャプテンなのは村上ですよ。

今田によれば、倒置同定文は属性を与えることによって、未同定の対象を同定するという機能を持つ。AハBダにおいて、AはBという属性を与られることで初めて同定される対象である。Aにあたるだれかがいて、それがBだと同定しているわけではない。一方のナ分裂文は変項Xを含む命題が主語で、述語部分が焦点となっており、焦点情報を提示することでその変項Xに値（この場合はB）を割り振る機能を果たしている文である。倒置同定文からはナ分裂文が成立しないのは両者のこのような機能の差によるものであると言えよう。

次に、倒置同一性文から作ったナ分裂文は、文脈がないと不自然になるものが多い。

(71)　ハリネズミはヤマアラシだ。（例文は今田）

(72)？ハリネズミなのはヤマアラシだ。

(73)　ハリネズミなのはヤマアラシだ。モグラじゃない。

これは、(71)が、ハリネズミであるなにかがいて、それに当てはまるのがいろいろな可能性の中から選ばれたヤマアラシだというわけではなく、ハリネズミの別名がヤマアラシで

あることを述べた文だからである。このようなタイプの同定文は単独でナ分裂文にすると(72)のように据わりが悪い場合が多いが、例えば否定という形であれ、ハリネズミと同じ動物である可能性のあるいくつかの種が想定され、その中から該当するのがヤマアラシだという文脈がある(73)のような場合には適格性が増す。

一方、(75)は、ハイド氏と同一人物である可能性のある何人かが想定され、その中からジキル博士が選ばれたことを表す適格な文となる。(72)に比べて(75)の方が適格性が高いと感じるのは、ジギル博士と同じ範疇に属する可能性のある複数の人がヤマアラシと同じ範疇に属する動物より想定しやすいこと及び、ハイド氏がまだ同定されておらず、ある人Xがハイド氏であり、そのXがジキル博士であることを表す文として、それだけジキル博士の情報価値が高くなるからであろう。即ち、Bが意味的または文脈上Aに当てはまる可能性のあるいくつかの中から選ばれたことが含意される場合にはAナノハBダが自然になるわけである。このような場合、倒置同一性文は変項Xを含む命題が主語となり、焦点情報を提示することでその変項Xに値を割り振る機能を果たしている分裂文と類似の機能をもつためであろう。用いられる名詞句はABともに個体・種・役割のいずれも可能である。

(74)　ハイド氏はジギル博士だ。[注5]

(75)　ハイド氏なのはジギル博士だ。

最後に一般記述文のAハBダについては、(77)のようにAナノハBダが不自然な文となるものが多い。

(76)　私は学生だ。

(77)*　私なのは学生だ。

そもそも、一般記述文は、Aに当てはまるのは何かを問題にしているのではなく、Aの性質や状況などを記述する文であるため、変項Xを含む命題が主語となり、述語部分で変項Xに値を割り振る機能を果たす分裂文の機能とは相容れないからである。

以上の考察から、AハBダで表される名詞述語文のうち、名詞句の意味によっては意味が近くなるのは役割・値解釈の同定文と倒置同一性文の一部であること、ただしナ分裂文を用いる何らかの必然性が要求されることが明らかになった。

４．ABの関係と分裂文

今田（2009）は名詞述語文は非常に多様なXとYの関係を表すことができることを考察し、隣接関係を表す事例として(78)の名詞述語文を挙げている。この中では、いわゆる措定文にあたるaからｇは、Aを前項名詞句にしたナ分裂文になりにくい。

(78) a．警察署は消防署の隣だ。（場所－場所）

b．私は沖縄です。（人－出身地）

c．新婚旅行はマチュピチュ遺跡だった。（旅行－目的地）

d．同社の設立登記は十四日だった。（出来事－時間）

e．柏レイソルは現在15位だ。（チーム－順位）

f．盛りつけは一番最後だ（手順－順序）

g．プラトンは右から２番目だ。（事物－場所）

h．15位は柏レイソルズだ。（役割－値文）

一方、いわゆる倒置指定文のhは(79)のようにナ分裂文にしても適格となる。

(79)h'. 15位なのは柏レイソルズだ。

逆に、述部名詞句を主語として取り出したa'からｇ'は(80)のようにすべて倒置指定文に近接したナ分裂文として適格となる。[注6] 一方いわゆる措定文に近づいてしまうh'は不適格となる。即ち、このような隣接関係を表わす名詞述語文がナ分裂文になるかどうかは、その文が措定文か倒置指定文かによって決まるが、倒置指定文であれば、ほぼ問題なくナ分裂文にすることが可能であることになる。

(80)a'. 消防署の隣なのは警察署だ。

b'. 沖縄なのは私です。

c'. マチュピチュ遺跡なのは新婚旅行だ。

d'. 十四日なのは同社の設立登記だ。

e'. 現在15位なのは柏レイソルだ。

f'. 一番最後なのは盛りつけだ。

g'. 右から２番目なのはプラトンだ。

h'.*柏レイソルズなのは15位だ。

このような隣接文の倒置指定文をナ分裂文とした場合、a''からg''のように、AとBの関係を明確にするためにa''（場所が）やb''（出身地が）などを補って考えることができる。その場合Aは明らかに節となり、単なる名詞とは異なって「Aである」という意味を強く獲得する。これが単純な同一・帰属関係を表わす場合に比べ、隣接関係を表わすAとBの場合の方がナ分裂文になりやすい理由ではないかと思われる。一方h''はこのような補語を想定することはできない。

(81)a''.　（場所が）消防署の隣なのは警察署だ。

b''.　（出身が）沖縄なのは私です。

c''.　（目的地が）マチュピチュ遺跡なのは新婚旅行だ。

d''.　（日にちが）十四日なのは同社の設立登記だ。

e''.　（順位が）現在15位なのは柏レイソルだ。

f''.　（順序が）一番最後なのは盛りつけだ。

g''.　（場所が）右から２番目なのはプラトンだ。

h''.　*（φが）柏レイソルズなのは15位だ。

隣接文の他の例としては以下のようなものがある。(82)は花子が仕事か休みかという状況を表わす。(83)はその前項名詞句と後項各詞句を入れ替えたものである。(86)もいわゆるうなぎ文(85)の前項名詞句と後項名詞句を入れ替えた倒置指定文であるが、これらも(84)(87)のようにナ分裂文にすることができる。

(82)　花子は夏休みだ。

(83)　夏休みは花子だ。

(84)　夏休みなのは花子だ。

(85)　僕はうなぎだ。

(86)　うなぎは僕だ。

(87)　うなぎなのは僕だ。

(88)のようにAハBダの関係がいわゆる同一や包含でない隣接関係を表わす倒置指定文の場合、帰属関係や同一関係の場合と比べて直接的な関係でないほど(89)のようにAでないものやBでないものとの対比などを通じてAとBとを強く結びつける必然性が高くなること、後項の情報価値が高くなりBが焦点になりやすいことなども関係しているのではないかと考えられる。逆に言えば、AとBが同一や包含の関係である場合には、(91)のようなナ分裂文を使わず、(90)のようにAハBダで十分である場合が多いわけである。

(88)　学校は花子だ。

(89)　学校なのは花子だ。

(90)　先生は田中さんだ。

(91)　先生なのは田中さんだ。

５．前項名詞句の性質

５．１　形容詞的な名詞句

(92) のように、ナ分裂文の前項に用いられる名詞は意味的に形容詞的なものが多い。例えば(93) (95)はその例である。この中には「問題の学生」「問題な学生」のように、名詞ではあるが、名詞接続の場合にNナになり得る、いわゆるナ形容詞に近接する名詞も多く見られる。この場合AハBダも可能ではあるが、多くの場合AナノハBダの方がより自然である。

(92)　形容詞的意味を持つ前項名詞句の例

Aの特徴	例
形容詞的意味	欲求不満　病気　問題 アメリカ　マニア　～がち　日本語読み　美人　低脳　負け犬　小心者　苦戦続き　猫舌　有料　　旬　同一人物　～以下　ブス　悪　人気　　すごすぎ　いい男　お似合い　エリート　年上　　イケメン　～向き　ツボ　女の子　正解　お勧め　山崎　適役　（工事etc.）中 バカ売れ　～マニア　省エネ　話題　～向き　脅威etc.

(93)　欲求不満なのはあなただ。

(94)　欲求不満はあなただ。

(95)　病気なのはあなただ。

(96)　病気はあなただ。

さらに、前にも触れたように(97)や(101)はやや不自然となるが、そこに形容詞をつけた(98)(102)は多少容認度が高くなるようである。つまり、形容詞によって修飾された名詞は名詞ではあるが、形容詞がつくことで、(99) (103)(104)のように、別のそうではない対象が想定しやすくなり、分裂文を用いる必然性が高くなるためであると考えられる。

(97)*　山田さんなのはあの人だ。

(98)？意地悪な山田さんなのはあの人だ。

(99)　－あの人が意地悪な山田さん？

－意地悪な山田さんなのはあの人。あの人は親切な山田さん。

(100)　あの人は親切な山田さんだ。意地悪な山田さんなのはあの人だ。

(101)　－？犬なのはロキシー。

(102)　－大きい犬なのはロキシー。

(103)　－大きい犬なのはロキシー。大きい猫なのはシドニー。

(104)　－大きい犬なのはロキシー。小さい犬なのはシドニー。

５．２　後項名詞句とメトニミー的関係にある名詞句

ところで、名詞述語文の中には、(105)(106)のような文末名詞文（新屋，1989）と呼ばれるものがある。これは文中の述語が主語の性格や状況を表しており、主語と述語の間にメトニミー的な関係がある（今田，2008）ものである。このような文末名詞文に用いられる名詞を新屋は(107)のように分類している。

(105)　川田君はすなおで朗らかな性格です。（例文は新屋）

(106)　梓川は、この春とは少し異なった感じだった。（例文は新屋）

(107)　新屋（1989）の文末名詞文の分類より

A	種類，類，たぐい，タイプ，方，部類，クラス，階層，系統，パターン
B	性質，性格，気質，気性，性分，たち，体質，人柄，立場，構成，構造，仕組み，形式，様式，顔立ち，人相，体格，匂い，形，趣，体裁，運勢，身分，出身
C	感じ，様子，模様，状態，風，有様，形，風情，格好，空気，気配，気色，態度，素振り，言い方，口調，口振り，表情，調子，具合，勢い
D－１	感じ
D－２	感じ，気持，思い，心持，気分，心境
D－３	意向，気，魂胆，料簡，覚悟，考え，決心，心組，方針，予定，主義，計算，つもり
D－４	意見，考え，印象，考え方，認識，見方，解釈，判断
E	塩梅，具合，次第，道理，話，理屈，わけ，顛末，始末
F	ところ，近辺，近く，そば，隣，寸前，最中，途中，頃，直前，直後，後，時分
G	こと，話，噂，評判，由

この文末名詞文は述語名詞句が必ず修飾語を伴い、その述語名詞句の修飾語句だけが焦点になるのが特徴である。例えば(108)は、ピーターが何らかの性格を持っていることが問題になっているのではなく、どのような性格かが問題になっている。

(108)　ピーターはやさしい性格だ。（例文は今田）

興味深いことに、このような文末名詞文の主題を述語として取り出してみると、(109)から(111)のように、すべてNナノハの形の分裂文になる。[注6]

(109)　すなおで朗らかな性格なのは川田君です。

(110)　この春とは少し異なった感じなのは梓川だ。[注7]

(111)　やさしい性格なのはピーターだ。

これは、一体どうしてであろうか。筆者は述語名詞句の修飾語句だけが焦点となるという文末名詞文の特徴に関係があると考える。焦点というのは、その文における重要な情報であるから、焦点でない部分、即ちこの場合は被修飾語である名詞は、情報的にはそれほど重要性はないということである。それ故、(105) (106) (108) の名詞を削除して、修飾語句を述語として形を整えた(112)から(114)は(105) (106) (108)と情報量という点ではほとんど変わらない。

(112)　川田君はすなおで朗らかだ。

(113)　梓川は、この春とは少し異なっている。[注8]

(114)　ピーターはやさしい。

同じように、分裂文である(109)から(111)の前項名詞を削除し、修飾語句をノで名詞化して分裂文にした(115)から(117)も(109)から(111)と情報量という点ではほとんど変わらない。

(115)　すなおで朗らかなのは川田君です。

(116)　この春とは少し異なっているのは梓川だ。

(117)　やさしいのはピーターだ。

このように、文末名詞文で用いられる名詞句は主語とメトニミーの関係にあるため、実質的には重要な情報をもたず、全体としては属性を表す修飾部が主に情報を担っていることから、名詞句であっても全体として形容詞句の機能をもっていることによるのではないかと思われる。とすると、この現象もまた、５．１に含まれることになる。

５．３　最上級の意味を表わす名詞句

また、ナ分裂文では前項名詞句に一番やトップ、最速、最強、基本など、何らかの形で最上級の意味を表わす表現を伴うことも多い。

(118)　最上級的意味を持つ前項名詞句

Aの特徴	例
最上級的意味	最高　最年長　最古の部類　最速　最強　最難関　最下位　一番　トップ　基本　拠点 激安 etc.

(119)　漫画家の奥さんで一番美人なのは？#

(120)　Sun認定Java資格で一番簡単というか基本なのはどれなんですか？#

(121)　ネットで最強なのはどのサイト？#

これは、このような名詞句が、意味的に形容詞に近いのと同時に、情報伝達という観点からも、その特性をもつ複数の候補の中でもっともその程度が高いのは何かを焦点として述べることがきわめて自然であることによると言えるのではないかと思われる。

５．４　範囲を示す語句との共起

場所＋デや範疇＋ノ中デなど、範囲が示される例も多く見られた。その場合(122)(123)のように、最上級を伴うこともあれば、(124)(125)のように、そうでない例もある。

(122)　ネットで最強なのはどのサイト？#（最掲）
(123)　×××（アイドルグループ名）で一番Loveなのは？#
(124)　善玉菌の増やし方で人気なのは天然オリゴ糖#
(125)　この中で×××（スポーツ選手）とお似合いなのは？#

いずれの場合であれ、範囲を示すということは、内包を明確にしたうえで、その条件に当てはまる対象を指定するという分裂文の特徴と合致する。同時に、前件で範囲を限定するということは、それだけ相手の関心を後件に引きつけやすいという効果をもつと言える。さらに、２節で述べたように、前項が節らしさを獲得していることもその理由の一つであると言えよう。

５．５　「　」つきの名詞句

名詞句の中には「　」や”　”などをつけて、「いわゆる」という意味を表すものも観察された。(126)のオトナは、普通の大人という意味ではなく、大人買いをする人という意味で用いられている。ただし、引用符つきの場合はナノハを用いず、‘N’ハとしても自然である。引用符をつけることで、名詞のみであっても「いわゆるN」の意味になるためであると思われる。とすると、ナ分裂文で用いられる名詞句自体が「いわゆるN」の意味を表わし、節になりやすいということになる。

(126)　もっとも“オトナ”なのは21歳～25歳－#
(127)　もっともオトナなのは21歳～25歳－
(128)？もっともオトナは21歳～25歳－
(129)　もっとも“オトナ”は21歳～25歳－

５．６　N＋助詞ナノハ

分裂文の中には、前項名詞句が「まで」「から」などの助詞を伴う例も多く見られる。

(130)　釣り好きの多い剣道部でも、ここまでなのはYとJだけだよね。（実際の会話）
(131)　『×××（漫画名）』13～16巻。途中からなのは予算の関係；#

これは、本稿の考察の対象であるAナノハBダの範囲を越えているが、ナ分裂文の前項が単なる名詞ではないことの一つの証拠と言えるかもしれない。

６．ナ分裂文の機能

６．１　一般の名詞述語文との違い

砂川（2005）は、AハBダを「後方焦点文」と呼んでいるが、先にも触れたとおり、この後方焦点文は、後項「～だ」で新情報を導入し、その新たな情報がそれ以降談話主題として引き継がれていく用法が圧倒的に多いとされる。同じように後方に焦点があるとされるハ分裂文にあたるナ分裂文とこれらの後方焦点文は、どのような違いがあるのだろうか。

書籍やインターネットの用例をあたったところでは、ナ分裂文の機能・用法には大きく分けて以下のように①から③の３つが認められた。この中には後項の名詞句Bが主題として引き継がれていく場合もあるが、そうでない場合もあった。

①対比による強調

このうち、最も多く見られたのが対比の用法である。これもいくつかに分けられる。

ア．AなのはBでなくて$\overline{B}$

「Bではなくて$\overline{B}$」のような形で、ある後項名詞句を否定することにより、別の後項名詞句$\overline{B}$を対比的に述べるのがこれである。例えば(132)は、「あなた」を否定して、対比的に「社会の方」であると述べることで、両者が強調される。(133)は掲示板から採った例である。県内でどこが一番都会かというトピックで書き込みが続いているが、前の人の発言を「愚かなり」と否定し、ナ分裂文を用いて別の意見を述べている。このように、ナ分裂文の焦点は後項名詞句であることによって、こちらでなくこちらと、その対比を強調的に述べる効果をもつことがわかる。単に最初からAハ$\overline{B}$ダと述べるよりもずっとインパクトが強くなる。自分でBを持ち出して否定することもあれば、他の人が述べたBを否定して$\overline{B}$を持ち出すこともある。その際$\overline{B}$が語り継がれる場合もそうでない場合もあった。

(132)　病気なのはあなたではなくて社会の方#

(133)　－やっぱり××（地名）が東海の中心だよね。（後略）
　　－愚かなり。東部で都会で拠点なのは×××（地名）だよ。#

(134)　－（前略）左側に行くとドイツ側のラインフェルデン駅に出ます。（現在は工事中のようですが）まっすぐ線路をくぐると、ドイツ側のラインフェルデンの街が見えてきます。（中略）
　　－工事中なのは道路です　ドイチェバーンのラインフェルデン駅は普通に利用できます。#（下線筆者）

イ．本質的にはAではないことを示す用法

ある主題についてはじめにAであるものが多く出てきて、あたかもAであるように感じるが、その後AナノハBダケダのような形で、その主題は本質的にはAではないことを示す用法である。

(135)　国の名前××はもちろん×××（ある名詞）から来ている。首都の名前○○（都市名）も××第５代大統領○○○が由来。憲法も国家の仕組みも××、解放奴隷も××訛りの△△（言語）を喋る。見た目は黒人のミニ××。見た目は・・・？そう、××なのは見た目だけ。#

(136)　Barなのは看板だけ？#

このような場合、それ以降の談話にはいかに$\overline{A}$である例が次々に挙げられていく。つまり、それ以降の主題は$\overline{A}$となる。逆に、$\overline{A}$が最初に出てきて、最後にAナノハＢダケダの形でまとめられる場合もある。

例えば(135)では、いろいろな物が他国の製品であることが述べられ、××は商人だけであることを強調する用法である。それ以降も$\overline{A}$の話が続く。

(137)　彼らは『××』の兵器なんかには見向きもしない。世界で最も使われている、地雷・小銃・ロケット弾は×××製と○○ばかり。この映画の予告編に出てくるのは何処の国の兵器か？△△製の自動小銃、旧ソ連製の戦車　××なのは商人だけ。#

ウ．AであるのはBだけであることを示す用法

イに似た例としては、Aであるものの例が続いたあと、ナ分裂文を用いて、本当にAなのはBだけだという(138)がある。AなのはBだけであるという点では、イと同じであるが、イは本質的には$\bar{A}$であることを述べるのが主眼であるのに対し、このウはBだけが真にAであることを述べているという違いがある。これらの用法の場合、Aが語り継がれる場合もBが語り継がれる場合もあった。

(138)　本当に鉄道マニアなのはマイケル・ペイリン#

これと関連しているが、後項名詞句Bにはダケ・ソノモノ・自体などが付加されて、AナノハBダケ／ソノモノ／自体ダのようになることも多い。

(139)　あと、行く予定なのは東側だけなので、（後略）#

(140)　公式なのはここだけ。#

(141)　一番問題なのは、「そういう体質」そのものだ#

これは、ハ分裂文の機能は文末を焦点にすることであるが、特にこのような語を付加し、暗にほかの候補の存在を示しつつ、ほかのものではなくこれだとBを取り立てることで、焦点をさらに際立たせることができるからであろう。この点が一般の名詞述語文との大きな違いであろう。

エ．AであるのはBだけではないことを示す用法

この用法ではまず、BがAであることが語られ、次いでB以外のものもAであると述べる。例えば(142)では、その店のビールが手作りであることが説明された後、AナノハBダケデハナイの形で、$\bar{B}$もAであることが述べられている。

(142)　手作りなのはビールだけじゃない。

この用法の場合、これ以降Aが語り継がれる場合と$\bar{B}$が語り継がれる場合があった。

②　疑問詞による興味の喚起

加えて、ナ分裂文は、(143)から(145)のように、後件に「どれ」、「どうして」、「だれ」のような疑問詞を伴う例も多い。さらに、Aナノハ？の形で疑問詞である後件が省略された(146)のような例も見受けられる。

(143)　正解なのはどれ？#

(144)　ATM手数料が有料なのは何故ですか？#

(145)　休みなのはいつ？　#

(146)　最近の漫画で、大人におすすめなのは？最近の××で、大人がじっくりと堪能できる××を教えてください。（後略）#

これは分裂文が変項名詞Xにあたる特定の指示対象を求めるという機能を持っていることから生まれた用法であり、通常それ以降の談話の中でその答えが出てくる。他者に対する問いかけの場合もあれば、自分でそれに答える場合もある。このような例は、掲示板やHPのタイトルなどにも多く見られる。同じ内容が文中では分裂文以外の形で表現されていることも多い。

これも、単にAハBダと述べる場合に比べ、「え、なんだろう」と読者の興味を引き、

読んでもらいやすいと同時に、もっとも重要な情報に目を向かせるという効果を生む。この場合、自問自答であれば話者が、質問である場合には、質問の受け手が、Bを導入し、それ以降の談話でこのBが主題として語り継がれることが多い。

③一応のまとまりをつける

このほかに、話題になっている状況の原因や背景をナ分裂文で表わすこともある。例えば(147)では、前に「私」が部屋に感じる違和感について書き、その違和感の原因がナ分裂文で説明されている。しかし、それ以降はこの違和感についても原因についても語り継がれることはなく、部屋に飾ってある写真の話題に移っている。これは、この例の場合、違和感の原因そのものでなく、部屋の特徴を描写することに主眼があるためであるが、場合によってはその原因そのものが主題に変わることは充分に可能であろう。

(147)　私は部屋の中を見まわした。ここに来るといつも感じるこの違和感の正体を、考えてみるのだけれどわからない。なんとなくどこかが歪んでいるのだ。（中略）問題なのは籐製の揺り椅子かもしれないし、レースのカーテンかもしれない。（『なつのひかり』）

いずれにしても、この用法は対比を表わす①やBを焦点として取り上げて強調する②の用法と異なり、前に述べたことの状況や原因などを説明し、話の流れに一応のまとまりをつける機能をもっていると言えるであろう。ただし、Bは主題になる場合もあるしそうでない場合もあり、主題として語り継ぐという機能とは異なることがわかる。

６．２　まとめ

以上の３つのパターンのうち、AナノハドレＱのような質問に自分あるいは他者がAナノハBダと答える場合にはBがそれ以降の談話で主題となって語り継がれることも多いが、それ以外の場合にはむしろAや$\bar{A}$または$\bar{B}$である対象について語り継がれていくことも多かった。これはハ分裂文についての砂川に指摘と異なるが、AナノハBダやそのバリエーションがBを焦点としながらも、$\bar{A}$や$\bar{B}$の存在を前提とした表現であり、ある場合にはこうであることを強調することで、逆にそれ以外の場合にはそうではないことを印象的に表現しうることに起因すると思われる。

ただし、今回は用例が少なかったため、詳細については今後さらに多くの用例に当たって検討する必要がある。

７．おわりに

以上、AナノハBダで表わされるナ分裂文を前項の節らしさとの関係や名詞述語文の類型との異同、ABの関係あるいはAの性質という観点から分析するとともに、その機能について考察した。その結果、前項の節らしさが明確な場合ほどナ分裂文になりやすいこと、AでないものやBでないものとの対比という条件のもとに、役割・値解釈の同定文や倒置同一性文との近接が見られること、ABが単なる帰属・同一の関係ではなく隣接関係である場合の倒置指定文の場合にナ分裂文になりやすいことなどがわかった。

また、Aが形容詞的な意味や機能をもつ場合にもナ分裂文になりやすい。これにはAが

後項名詞句とメトニミー的関係である場合も含まれる。さらに、Aが最上級または何らかの意味で限定された範囲を表わす名詞句である場合、あるいは後件が疑問詞である場合など、特に後件がなんであるかが焦点となる場合にもナ分裂文になりやすい。

こうした性質からナ分裂文は見出しなどでも多く用いられているが、$\bar{A}$や$\bar{B}$の存在を前提とすることで対比的にBを焦点として相手の注意を引きつける機能やこれまで述べてきたことに一応のまとまりをつける機能などが観察され、必ずしもそれ以降の談話にBを主題として導入する機能をもたないナ分裂文も見られた。いずれにしても、単にAハBダと述べる場合に比べ、$\bar{A}$や$\bar{B}$との対比によりインパクトの強い表現となることがこの文型を用いる最大の動機であると言えよう。

本稿ではAナノガBダについては考察しなかったが、この形との違いも含め、さらに考察を続けていくことが今後の課題である。

[注]

1）①～⑦の番号は筆者。

2）ただし、砂川（2007）はガ分裂文にも格助詞を伴う例が全くないというわけではないとしている。

3）#はインターネットから採った用例であることを示している。また、×××はメーカー名。注筆者。インターネットから採取した例についてはプライバシーなどの問題もあり、以後も固有名詞などにに変えて×××を用いることがある。なお、該当の名詞が一つの例で複数回が出てくる場合は××、×××は別の対象を指す。必要に応じて○や△も用いる。

4）ニュースより（http://bizmakoto.jp/bizid/articles/0810/24/news015.html）

5）今田はこれとは逆の「ジキル博士はハイド氏だ」の例文を用いているが、謎の人物ハイド氏を見て、ジキル博士と同一人物であると同定する方が自然だと思われるので、ここではハイド氏を主題にしたものを用いた。

6）ただし、AハBダとBハAダとが意味論的、機能的に同じ意味を表すというわけではない。

7）本来は過去形なので「感じだったのは」となるべきであるが、本稿では現在形に統一した。

8）「異なる」は名詞修飾語として用いられる場合には「異なった」となり、文末で用いられる場合には「異なっている」の形で用いられることが多い。

[参考文献]

天野みどり（1995a）「「が」による倒置指定文－「特におすすめなのがこれです」という文について－」『人文科学研究』八十八輯、新潟大学

――（1995b）「後項焦点の「AがBだ」文」『人文科学研究』八十九輯、新潟大学

今田水穂（2008）「日本語述語文の記述的分類の再分析」『筑波応用言語学研究』15

――（2009）「日本語名詞述語文の意味論的・機能論的分析」筑波大学博士（言語学）学位請求論文

新屋映子（1989）「“文末名詞”について」『国語学』195、国語学会
砂川有里子（1995）「日本語における分裂文の機能と語順の原理」『複文の研究（下）』くろしお出版
――（1996）「日本語コピュラ文の談話機能と語順の原理－「ＡがＢだ」と「ＡのがＢだ」構文をめぐって－」『文藝言語研究　言語篇』30、筑波大学
――（2005）『文法と談話の接点　－日本語の談話における主題展開機能の研究－』、くろしお出版
――（2007）「分裂文と文法」『日本語文法』７巻２号、日本語文法学会、くろしお出版
西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房

[参考資料]
『なつのひかり』（江國香織、集英社文庫）
『みんなの日本語』Ⅱ　本冊、翻訳・文法解説、スリーエーネットワーク
『中級日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター、凡人社

On Cleft Sentences A*nanowa* B*da*

KUMAI, Hioroko

The purpose of this paper is to find out what kind of Japanese nominal predicate sentences A*wa* B*da* can be replaced with *Na bunretsubun*, or *Na* cleft sentences, A*nanowa* B*da* and the meaning and functions of such *Na bunretsubun* in contrast with other nominal predicate sentences. The author argues that *Na bunretsubun* can be replaced with certain types of specificational sentences (*yakuwari-atai kaishakuno doteibun* and *tochidoitsusebun*) especially when there is a contrast between A and $\overline{A}$ and/or B and $\overline{B}$ as well as when the antecedent NP keeps the characteristics of a clause. In addition, when the relation between A and B is regarded as not ascriptive nor identical but adjacent or when A has a meaning and function close to an adjective, *Na bunretsubun* can be used. This includes when A is a *Bunmatsu doshi*, or Sentence Final Nouns, metonymical to B. Moreover, when B is a focus of the sentence within which (1)A has a meaning of the superlative degree and/or accompanies an expression of a range or (2)B is an interrogative, *Na bunretsubun* is often used. Reflecting these characteristics, this type of sentence tends to be used as a title. It is chosen mainly because it has a much stronger impact than ordinary nominal predicate sentences, with a contrast between A and $\overline{A}$ or B and $\overline{B}$.